

優秀賞

みんな幸せに

埼玉県立伊奈学園中学校 3年

渡邊 美咲

中一の頃、片麻痺体験というものを、したことがある。学校に、片麻痺を患っているAさんを招いて、「障害」について講話していただいた。この体験学習は、学校の授業の一環として行われたものである。授業のテーマは「世の中をハッピーにするにはどうしたらよいだろうか」で、障害のある人と共存していくための方法について考えるものである。

私の周りには障害のある人がいなかった。電車やバスなどで見かけることはあっても、特に関わることはなかった。私にとって、この授業は、障害のある人と関わる初めての機会だった。これを機に「障害」についての知識を深めようと、体験やAさんへの質問を積極的に行った。

片麻痺体験をしてわかったことは、「助けてくれる人」がいることの重要性である。片手に器具をつけられていると、近くにあるものでも取るのがかなり難しかった。もどかしい気持ちでいっぱいになる。そんなとき、友達の救いの手をさしのべられると、温かい気持ちになったのだ。障害者の人も同じことを思っているのかと気になり、Aさんに質問を試みた。

「困っているときに周りの人に助けてもらえると、Aさんもうれしくなりますか。」

すると、Aさんは笑って答えた。

「とてもうれしくなりますよ。困ったことがあって、助けてほしくても、周りに迷惑をかけてしまうのではないかと不安になるんです。そんな時、さっとかけよってくれる人には、感謝しかありません。」

私は、今まで電車やバスなどで見かけてきた障害のある人のことがふっとよみがえってきた。思い出してみると、その人達は、乗り降りを大変そうにしていたり、移動するのに時間がかかったりしていた。きっと心細かっただろう。なぜ自分は関わろうとしなかったのか。くやしくて、つらい気持ちになった。しかし、それと同時に、今度障害のある人を見かけたら勇気を出して声をかけてみようとも思った。

私はこの片麻痺体験を通して、障害のある人の気持ちを少し理解することができた。助けてもらえることのあたたかさとありがたさを、感じることができた。この体験学習がなかったら、知ることがなかったであろうことを知ることができたのである。ここで学んだことをもとに出した、「世の中をハッピーにするにはどうしたらよいだろうか」の答えは「『助け合える』環境をつくること」だ。私は、今では町で障害のある人を見かけるたびに声をかけている。困っていそうだったらすぐに手をさしのべている。そうすると、いつも「ありがとう」と笑って感謝してもらえるのだ。「助け合う」という行為は助ける側も助けられる側も「ハッピー」にする。

私はこの体験を通して障害のある人の気持ちを理解したが、この世の中には、気持ちを理解していない人が、まだたくさんいると思う。まずは知ることから、そして次に行動してみる。そうした動きが広まることで、世の中をさらに「ハッピー」にできるのではないかと考える。